
バカとテストと召喚獣 そして+α

ME-GA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣 そして＋α

【Nコード】

N7177L

【作者名】

ME-GA

【あらすじ】

ここ文月学園では画期的なシステムが導入されている。

吉井 明久とその他バカ＋αが贈る学園コメディー！

第0問（前書き）

問1. 作者に足りないものを3つ上げなさい。

姫路瑞希の答え

『学習能力，運動能力，常識』

教師のコメント

正解です。その他に，『頭脳，身長，e t c…』数え切れないほどあります。

土屋康太の答え

『異性への興味』

教師のコメント

あなたが間違っています。

ですが隅に木下君の写真があるのは何故でしょう？

吉井明久の答え

『栄養』

教師のコメント

足りてないのはあなたです。

真生梨央の答え

『教師にも反論できる強い心』

教師のコメント

あとで生徒指導室に来てください。

最終コメント

というかあなた達3人とも、しっかり3つ書きなさい。

第0問

桜並木。

舞い散る花びら。

そして…。

「あ、てつじ…じゃなくて西村先生。おはようございます。」

「今、鉄人って言おうとしなかったか。」

「気のせいですよ。」

僕の名前は吉井 明久。

今年、ここ文月学園の2年生になった。

「ほら、お前の分だ。」

「どうも。それにしてもどうしてこんなめんどくさい方法でクラス分けするんですか？」

「ま、これもこの学園のやり方だ。」

…なんかこの封筒開けにくいな。

「俺は去年お前を見てもしかしたら吉井はバカなんじゃないかと思っ
っていたんだが…」

「ふふ、それは大いなる間違いですよ。」

「ああ、疑いは無くなった。」

あ、開いた。

さて、僕のクラスはDかな、それともC？

「お前は正真正銘のバカだ！」

Fクラス。

「せんせーい！」

後方で声がするな。

ガチンコッ！

「ぐあああ！アゴがっ！アゴが割れたあああ！！」

「すいません！先生、遅刻しちゃいそうになりました！！」

「違うの！？僕に謝ったんじゃないの！？」

ビシッと敬礼し、先生に向かう女子生徒がいた。

「まったく真生^{まこと}。転校早々遅刻なんて冗談にならんぞ？」

先生！？ここはまず生徒の心配するもんじゃないの！？

目の前で生徒が悶えてるのに！！

「あいあいさー！この真生^{まこと} 梨央^{りお}！

人に注意されれば2日で忘れるという性を持っています！」

「守る気は無いんだな。」

転校早々ハイテンションだな。

「さして、おお！Fクラス！！」

「ははは、Fクラスなんて君も頭が悪かったんだね。」

「お前が言えた義理か。」

「んゝ、やっぱり編入試験でやる気出さなかったのが悪かったかなゝ。」

や、やる気を出さなかったのか…。

「まあ、これから一緒のクラスみたいだしヨロシクね！
馬…じゃなくて吉井君？」

今、馬鹿って言いそうになったよね。
なったよね？

「ここがFクラスか…。」

「うほー、想像以上にぼろっちいねえ。」

「とにかく行こうか。」

ドアを開け放つ。

「おはようございます。」

「遅刻ですよ、吉井君に真生さん。はやく席についてください。」

「先生、席はどこですか？」

「適当に座ってください。」

まったく、なんなんだこの学校は。

すこし成績が悪いからってこれだもんなあ。

席だって座布団に卓袱台だし…。

よっこいしょと…。

「…先生，座布団に綿が入ってません。」

「我慢してください。」

「先生，すきま風が寒いんですけど。」

「我慢してください。」

「先生，卓袱台の脚が折れました。」

「我慢してください。」

我慢できるかあ！！！！

「冗談です。ボンドでくっつけてください。」

バキリ。

直後，教卓が崩れ落ちた。

「工具を持ってきます。自習しててください。」

……………。

「なんて設備が悪いんだ。ここで一年過ごすのか。」

「だったら振り分け試験でいい点とっとけ。」

「雄二！」

コイツは坂本 雄二。

去年からつるんでる悪友だ。

「俺だけじゃないぞ。」

「はろはろ。ウチもFクラスよ。」

「島田さん！やっぱり島田さんもFクラスだったんだ！」

そして島田さんは僕の首を締め上げてくる。

「ウチが馬鹿だとしても言いたいのだ！！」

「イタイイタイイタイ！胸がないからあばら骨が耳にぐいぐい当たってイタイ！！グハッ！！」

島田さんのとどめのアイアンクロー。

ぐふ，結構効いた…。

「私ははじめましてだね！真生^{まき} 梨央^{りお}でっす！」

そして，すかさず超低姿勢で島田さんや真生さんのスカートの中をのぞき込んでいる男がいた。

「土屋^{ムッツリーニ}康太！」

彼は土屋^{ムッツリーニ} 康太こと寡黙なる性職者だ。

彼のエロパワーは尋常じゃない。

「って真生さん！ムッツリーニが死んじやう！首しまってるよ！」

「だって今この人スカートの中見てきたんだもん。」

瞬間，ゴキリと嫌な音がした。

「ムッツリーニ！！！」

「ピ、ピ、ピ…。」

「どうした，ムツツリーニ!？」

「ピンクの…縞々…。」

ムツツリーニ，ありがとう。

君の命は無駄にしない!

「ムツツリーニの無念! 僕が晴らす! 必ずや真生さんのパンツをムツツリーニのカメラに写して左腕が折れる! 関節が曲がらない方向に折れ曲がる!!」

「相変わらずにぎやかじゃな。」

「秀吉!」

秀吉は今日も美人だなあ。

日に日に秀吉が女の子に見える。

「やあ，唯一の女子が秀吉で嬉しいよ。」

「ワシは男子じゃ。」

「ウチが女子よ。」

「分かってないなあ。女子って言うのは見ていて癒される，心の優しいおしとやかな人で，島田さんのようなガサツで乱暴で胸がないのは間接に激しい痛みがあああ!!!!」

そしてまた扉が開いた。

「あの，遅れてすみません…。」

その人は，Aクラス並みの実力を持つと言われる，

姫路 瑞希さん，だった。

第0問（後書き）

問2. 次の意味をもつことわざをあげなさい

? 「得意な事でも失敗することの例え」

? 「悪い事があつた後に追い討ちをかけるようにおこること」

姫路瑞希の答え

『? 弘法も筆の誤り

? 泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。

? なら他に『かっぱの川流れ』や『猿も木から落ちる』

? なら『踏んだり蹴ったり』『弱り目に祟り目』などがあります。

土屋康太の答え

『? 弘法の川流れ』

教師のコメント

シュールな光景ですね。

吉井明久の答え

『? 泣きつ面蹴ったり』

教師のコメント

君は鬼ですか。

真生梨央の答え

『? 猿も崇りに落ちる』

『弘法を蹴ったり』

教師のコメント

勉強してください。

~~~~~

問3・調理の為に火にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いられるべき金属合金の例を一つ上げなさい。

姫路瑞希の答え

『問題点… マグネシウムは火にかけると激しく反応する為危険であるという点。』

合金の例… ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので「鉄」ではダメですね。

土屋康太の答え

『問題点…ガス代を払っていなかった点。』

教師のコメント

そこは問題ではありません。

吉井明久の答え

『合金の例…未来合金↑すごく強い』

教師のコメント

すごく強いと言われても。

真生梨央の答え

『問題点…かまどのために、鍋が使えないこと。

合金の例…ステンレズ

』

教師のコメント

あなたの家にはかまどがあるのですか。

「ステンレズ」とは複数形のことでしょうか、それとも女の子同士のことでしょうか。

## 第1問（前書き）

問1. 以下の英文を訳しなさい

『This is the bookshelf that my grandmother had used regularly.』

姫路瑞希の答え

『これは私の祖母が愛用していた本棚です』

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

『これは

』

教師のコメント

訳せたのは『This』だけですか。

吉井明久の答え

『○◆×※→』

教師のコメント

出来れば地球上の言語で。

真生梨央の答え

『これはお婆ちゃんです。』

教師のコメント

あなたの祖母は本棚ですか。

小乗陸生の答え

『日本人なら日本語で書いてください。』

教師のコメント

今、あなたの退学届けを書いています。

## 第1問

「すみませんっ、遅れ…ました。」

肩を大きく揺らして息をする少女は

本来ならAクラスにいるであろう

姫路瑞希，その人だった。

「あれ，姫路さん。何でFクラスに？」

「あ，はい。実は振り分け試験の時に体調不良で途中退席したので…。」

あ，そっか。

試験中に退席したら無得点扱いなんだっけ。

「一年間よろしくお願いします。」

…。

「雄二，ちよっといいいかな。」

「なんだ？」



「これは酷すぎるだろ！いくら学力差社会だからっていくら何でもこれは！」

「ああ，お前が言いたいことは分かってる。」

「試召戦争，だろ？」

そうだ。

いくらなんでもこんな設備じゃ体調不良者が続出するにちがいない。

「勉強嫌いのお前がこんなこと言い出すのは，姫路のため，か？」

「そうだよ！…違う違う！AクラスとFクラスの差が違いすぎるから！」

「でも，姫路さんに思いを馳せてるのはホントだろ？」

「…小乗！？いつからそこに！」

「さっき。」

こいつは小乗しょう 陸生りくせい。

去年から雄二と共につるむ悪友だ。

「とにかく，試召戦争だ。」

「みんな！俺たちFクラスはAクラスに試召戦争をしかけようと思う。」

あちこちからざわざわと声が上がる。

それはそうだ。

FクラスとAクラスとでは学力は月と亀ほど違う。

「正確には亀じゃなくてスッポンじゃぞ？」

秀吉！心を読まないで！！

「はいはい！試召戦争って何？」

「そうか、真生は今年来たから知らないんだな。」

「いいか、試召戦争ってのは俺たちがそれぞれ保有している『召喚獣』どうして戦争することだ。

『召喚獣』は俺たちがそれぞれ受けたテストの点数によって強さが変わる。

高得点を取れば取るほど強くなるってワケだ。」

「俺たちじゃ無理があるって。」

「大丈夫だ。こっちには、姫路がいる。」

途端にあちこちからおおーつと歓声が上がる。

「それにムツツリーニもいる。」

そしてまた歓声が上がる。

「明久もいる。」

途端にもり下がる。

あれ、僕の扱い酷くない？

「コイツは開校以来初の【観察処分者】だ。」

「あの…。」

おずおずと姫路さんが手を挙げる。

「【観察処分者】ってなんですか？」

「おっと、姫路には縁遠い言葉だったか。」

いいか、観察処分者ってのは一言で言えばバカのことだ。

そして、そのバカの中でも特にバカなものにあたえられるいわば  
【バカの代名詞】だ。」

「いやあっ！恥ずかしい！！」

「当然、俺だって全力を尽くすぞ。」

『確か坂本は小学校くらいに『神童』と言われてなかったか。』

『じゃあ、Aクラス並が2人もいるってことか。』

「他にも木下や島田もいるんだ。いっちょやってみないか？」

するとあちこちから声が上がる。

やはりみんなここの設備に文句はあったようだ。

「よし、まずは手始めにEクラスを落とす。言伝は、明久。お前が  
伝える。」

え。

待ってよ。確か下位クラスからの大使って大体酷い目に遭うような…。

「安心しろ。いくらなんでもそんなことにはならんだろう。だまされたと思って行ってこい。」

「…うん！」

「騙されたあっ!!」

アイツらの顔、本気だった…。  
コロされるかと思った…。

「俺の読みが当たったな。」

「雄二！貴様あ!!」

その瞬間、雄二の指が僕の目に直撃した。  
僕は地面に突っ伏する。

「目があ!!」

「とにかく、明日は開戦だ。教科書くらいは読んでおけよ。」

そんなこと言われなくても分かってるよ。バカヤロウ。

明日は、僕達の華々しい開戦の日だ…。

## 第1問（後書き）

問2．以下の問いに答えなさい。

時に食用できる地下茎を持つ、英語で『lily』という名の植物を答えなさい。

姫路瑞希の答え

『ユリ』

教師のコメント

正解です。さすがですね、姫路さん。

地下茎は鱗茎と呼ばれ、養分を蓄えて厚くなった葉で、ネギやらっきょうなども鱗茎に含まれます。

吉井明久の答え

『山芋，ジャガイモ，サツマイモ』

教師のコメント

食用以外にも目を向けてください。

真生梨央の答え

『伊勢エビ!』

教師のコメント

小乗君と共に即刻退学してください。

~~~~~

問3．以下の問いに答えなさい。

(1) $4 \sin X + 3 \cos 3X \parallel 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に存在するXの値を一つ答えなさい。

(2) $\sin(A+B)$ と等しい式を示すのは次のどれか、?
?の中から選びなさい。

? $\sin A + \cos B$? $\sin A - \cos B$
? $\sin A \cos B$? $\sin A \cos B + \cos A \sin B$

姫路瑞希の答え

(1) $X \parallel \pi/6$
(2) ?

教師のコメント

そうですね。角度を「。」ではなく「 π 」で書いてありますし、完璧です。

土屋康太の答え

(1) $X \parallel$ およそ3

教師のコメント

およそをつけてごまかしたい気持ちも分かりますが、これでは解答に近くても点数はあげられません。

吉井明久の答え

(2) およそ?

教師のコメント

先生は今までたくさんの生徒を見てきましたが、選択問題でおよそ

をつける生徒は君が初めてです。

小乗陸生の答え

(1) X Ⅱ バツ

(2) ? ? ? ?

教師のコメント

まじめにやりなさい。

第2問(前書き)

問1. () に適切な言葉を書き入れなさい。

『光は波であって()である』

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント

よくできました。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

小乗陸生の答え

『津波』

教師のコメント

「光」は見えていますか。

第2問

「いいか、お前ら。相手はEクラスといえど俺たちよりは上位クラスだ。決して油断するな。」

試召戦争を迎えた朝。

僕達は教室に集い、開戦の準備をしていた。

「さあ、行け！俺たちに必要なのは卓袱台じゃない！Aクラスのシステムデスクだ！！」

その一言を合図に僕達の戦争は幕を切った。

まず、教師捕獲部隊が出撃する。

狙いは数学の木内先生だ。

何故かという、それは当然島田さんを前線に押しやるためだ。

ドイツ帰りの彼女は漢字が読めず、その他の教科は弱い。数学なら漢字は読めなくてもできるものはある。

『木内先生確保おー！』

「よし、出撃だ！！島田、秀吉、ムッツリーニは前線に出ろ！」

そして、遂に両クラスは相対する。

「Fクラス、島田美波、数学勝負を申し込みます！」

「承認します。」

直後、先生を中心に大きな空間が展開する。

初めてみる現象に真生さんも驚きを隠せないようだ。

「す、スゴイ！アレがA・Tファイード!?」

「いや、違うから!!」

「試験召喚獣、召喚!! 試験召喚っ!!」
サモン

そして、島田さんの足下に術式が発動し、目の前に小さな召喚獣が出現する。

「ここを通りたければ!」

「ワシらを倒していくのじゃ!!」

教室の外はすごいことになってるなあ。

「雄二，どうするの？」

「別に。」

「作戦は？」

「ない。」

「ないの！！！！？？？」

こんなんでもEクラスに勝てるのだろうか…。

あ，でも島田さんなら大丈夫かな。押し切られない限りは…。

「ヤバイ！押し切られる！！」

早っ！！

「島田！今ぬしがやられればここは終わりじゃ！」

「……回復試験。」

「ありがとう！」

急いで島田さんはフィールドを抜け，試験部屋に駆け込む。

『小乗！悪いが手を貸してくれ！！』

「あいよ。試験^{サモン}召喚。」

術式が発動し，改造制服と釘バットを身につけた召喚獣が出現する。

そして、Fクラスもどんどん押し切り、善戦したかに見えた。
が。

「どうやら、Fクラスだからといって甘く見ていたようね。」

Eクラス代表…中林 宏美。

なるほど、流石にヤバイと思って代表自らお出ましか。
クラス代表とはすなわち、そのクラスで最も成績の良かったもの
なる。

つまり、Eクラス代表とはDクラス相当の点数をほこることになる。

「ヤバイよ雄二。人がどんどん補修室送りになっていく。」

「大丈夫だろ、島田も回復試験を終えて戻ってきてるはずだ。」

「ねえねえ、ミナちゃんね、なんか女の子と一緒にいて身動き取れ
てないよ。」

「なに!？」

「離れなさいよ！美春！！」

「お姉さま！今日こそは私のものになって貰いますわよ！！」

「だーから！私はあるものにならないってなんども！！」

アレはダメだ、清水 美春さんに捕まればもう終わったな。

「どうする？雄二。」

「安心しろ。もう時間は充分に稼いだ。」

その言葉と同時に姫路さんがFクラスの横を通り過ぎた。

「あ、あのっ！」

「あれ、姫路さん？Aクラスならここは通ってないわよ？」

「いえ、そうではなくて。私、Fクラスの姫路瑞希はEクラス代表に対決を申し込めます！」

「え、あ…はい。」

姫路さんはすうつ、と息を吸い呪文を唱える。

「試獣召喚です！」
サモン

表示される点数は、

<現代国語>

姫路瑞希

V S

中林宏美

339点

V S

129点

「ご、ごめんなさいっ！」

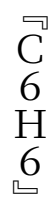
ドンー！！

初戦，Eクラス戦は僕達，Fクラスの勝利に終わった。

第2問（後書き）

問2. ベンゼンの化学式を書きなさい。

姫路瑞希の答え



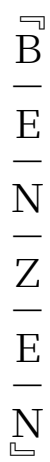
教師のコメント
簡単でしたかね。

土屋康太の答え



教師のコメント
君は科学をなめていますか。

吉井明久の答え



教師のコメント
あとで土屋君と一緒に職員室に来るように。

真生梨央の答え



教師のコメント
難しいことを覚えているようですが、
それは『ベンジラルコール』です。

第3問（前書き）

問1. ギターを弾く際に用いられるプラスチックの爪のようなものをなんというか

姫路瑞希の答え

『ピック』

教師のコメント

正解です。ピックは爪という意味を持っていますね。

坂本雄二の答え

『ピック』

教師のコメント

おしいですね。ピックでは豚という意味になってしまいます。さすがに豚ではギターは弾けませんね。

吉井明久の答え

『爪』

教師のコメント

君はまず問題の意味を理解するところから始めましょう。

真生梨央の答え

『湿布』

教師のコメント
プラスチックです。

小乗陸生の答え
『切符』

教師のコメント
弾けるものなら弾いてください。

※涼風かえで様発案オリジナル問題です。

第3問

「さて。負けた気分はどうだい、Eクラス代表さん？」

僕達の前で正座をさせられている中林さん。

代表は戦争に勝てばそれこそクラス全体に称賛されるが、負ければ裏切り者として恨まれるのである。

「まあ、本来ならお前達のクラスとオレたちのクラスを取り替えるんだが…。」

ふう、これで何とか普通の学校よりは劣るものの多少の設備は手に入れることができるのか。

「この話はナシにしてやってもいい。」

「はあ！？何言ってるのさ、雄二！！」

冗談じゃない、一刻も早くあの教室からおさらばしたいというのに取り替え話だって！？

「俺たちの条件を呑めば、の話だな。」

「ちよっと待てよ、雄二。」

「どうした、陸生。」

「おかしいだろ。俺たちは試召戦争に勝ったんだ。とっとと教室を変えようぜ。」

その言葉に一同は『そうだ！そうだ！』と声を上げる。

「バーカ。俺たちの目標はAクラスだろうが。こんなクラスなんぞ

興味はねえ。」

「簡単な条件だ、俺たちFクラスがただのバカの集まりじゃない、そう言ったことを広めてくれるだけでいい。」

確かに相手側にとっては好都合な条件だ。

これさえすれば教室は変わらないのだから。問題は…。

「雄二。そんなこととして意味があるの？」

「俺たちの士気を高めるため、さ。」

「分かったわ、喜んでその条件吞ませて貰うわ。」

「おう、サンキュ。」

「ふう〜。今日は疲れたなあ。」

「まったくじゃ、補給テストに走り、戦線に戻るために走り、で大忙しじゃったからな。」

「…………。（コクコク）」

「僕なんて、朝も昼もろくに食べれてないから腹ぺこだよ。」

「ったく。少しは経済管理しておけよ。」

「仕送りが少ないんだ!!」

そう、僕の親は海外赴任で母さんと姉さんもその付き添いで家じゃない。

そのため僕はまったり一人暮らしライフを楽しんでいるのだが、今

日も食卓は潤わない。

「今日の夜は勝利を祝ってもやしにしようかな。」

「もやしすら買えないってどんだけ金がないんだ。」

「あの…、良かったら私を作ってきましようか？」

ひ、姫路さん…。あなたって人はどれだけ優しいんだ！！

「へ、へえ。瑞希ってば優しいのね。吉井にだけ作ってくるなんて…。」

島田さんの笑顔が引きつってるのは何でだろう？

「あ、それでしたら皆さんにも作ってみんなで食べましょう！」

「ほう、そいつは楽しみだ。」

「……………（コクコク）」

「楽しみにしておるぞ。」

「美味しいモン、期待してるぜ。」

「ハイ！！」

そんな今夜の夜ご飯。

「今日は奮発しちゃったなあ。」

僕は御馳走、もやしのみサラダに舌鼓をうっていた。

「うん！美味しい！やっぱいいなあ！」

ピンポン

誰だろう、こんな遅くに。

「はいはい？どちら様？」

「ヘイ！ヨッシー！」

「ヨッシーって僕のこと？」

「当然さね！！」

真生梨央さんだった。

「ほい、これ。」

「何？これ。」

「今夜のおかずにでもどうぞと思ってお裾分け！！」

「うん、ありがとう。でも、なんで家の場所知ってるの？」
「隣だから。」

プレートを見ると確かに【真生】と書いてある。
嬉しいなあ。中身は…………。

「これ…。」

「ザリガニ!! 今日その池で拾ったんだ!!」

「うん。それ拾ったって言わないから。ていうか、嫌がらせ？」
「美味しいよ？」

ほ，本気が目だ…。

「何てったって私の大好物ベスト3に入るからね！」

「うん。1位は？」

「伊勢エビ！」

「2位は？」

「エビ！」

「3位は？」

「ザリガニ！」

甲殻類ばっかじゃねえかつ!!!

しかも1位と2位ほとんど一緒だし！

「塩焼きが美味しいよ！」

「あ，うん。ありがと…。」

僕はぎこちない笑みを浮かべてドアを閉めた。

このかわいそうなザリガニたちは池に放しておこう。

第4問（前書き）

問1．楽器を弾く時に音の高さなどを会わせる行為をなんというか

姫路瑞希の答え

『チューニング』

教師のコメント

正解です。姫路さんは音楽も得意なんですね。

吉井明久の答え

『チューニング』

教師のコメント

おいしそうですね。私もガムは大好きです。吉井君にしてはかなり
おいしいですね。

土屋康太の答え

『chuing チュウイング』

教師のコメント

chuの現在進行形ですか。土屋君が考えていることはよくわかります。それなら「キス」や「接吻」が適切ですね。でも、間違いは間違いです。

小乗陸生の答え

『チョーキング』

教師のコメント

首が絞められそうで怖いです。

※涼風かえで様からの発案問題です。

第4問

お昼の授業も終わった。

「ふう。昼の授業も終わったし、飯でも食いに行くか。」

「あ、それなら僕も行くよ。」

「あ、あの…。」

どうしたんだろ？姫路さん。

「私、お弁当作ってきたんです。よかったらどうぞ…。」

おお！そうか、確か姫路さんが作ってきてくれたんだっけ！

「なら、今日は天気も良いようじゃし、屋上で食べんか？」

「お、いいな。」

うん。確かにこの青空の下姫路さんのお弁当も美味しいかもしれない。

「なら俺はジュースでも買ってくるとするぞ。」

「あ、ならウチも手伝う！」

「おう、頼む。」

雄二と島田さんがジュースを買いに言ったので僕達は屋上に移動した。

お弁当はいかにも女の子の手作りだという感じがあり、僕にとってはとても新鮮だ。

「さあ、みなさんいっぱい食べてくださいね？」

「……（パク）」

「あ！ずるいぞ、ムッツリーニ！」

「……………（ボタン！！！！）」

ムッツリーニは顔面から倒れて体をぴくぴくと痙攣させている。

「……………（むくり）」

「土屋君？どうですか？」

「……………（グッ）」

あ、『美味しい』と言いたいんだろう。

「どれ、ムッツリーニがそういうなら俺も食べてみるかな。」

そういつて陸生はおにぎりに手に手を延ばす。

「むぐむぐ。うんうん、塩と酸味と腐臭が効いててなかなか、ごふつ。」

「陸生イイイ！？」

まさか！去年は家に遊びに行ったときはカビの生えたみかんを食べても平気だった秀吉に次ぐ『鉄の胃袋』が！？

「あ、ありがとう…、姫路。なかなか個性的な味だったよ…。」（もう食べたくない…。）

「はい、ありがとうございます♪」

なんだろう。今小さな声で何か聞こえた気がする。

しばらくして雄二が戻ってきた。

「お、なかなかいい弁当だな。」

そう言って雄二は卵焼きにぱくついた。
瞬間にぶっ倒れた。

（明久！テメェ毒を盛ったな！？何か変な味がしたぞ！？）
（これが姫路さんの実力だよ！！酷いことは言わないよね！？）

これぞ僕達の間だけでできる心会話だ。

「あ、足が攣ってな…。」

さすが雄二。一瞬で相手を傷つけない言い方を考えた。

「ただいま。」

「あ、お帰り、島田さん。」

…。今島田さんにこんなものを食べさせるわけにはいかない！

「島田さん。その手をついてるあたりに虫の死骸があったよ。」

「ええ！？もう、早く言ってよ！！」

「ゴメンゴメン。すぐに手を洗ってきた方がいいね。」

つくづく不運だね。

まあ、僕的には助かるが。

島田さんはぱたぱたと行ってしまった。

（さあ、雄二！今のうちに食べるんだ！！）

（ふざけるな！次は俺でも死ぬ！！）

（何言ってるんだ！姫路さんが悲しむぞ！！）

（姫路はおそらく明久に食べて貰いたいはずじゃぞ。）

（そんなわけ無いだろ！！）

（明久、いい加減腹を決めろ。そして腹を下せ。）

（コクリ）

ちい！こうなったら！

「姫路さん！あれは何だろう！！」

「え？何ですか？」

（食らえ！雄二！！）

（ぐわあっ！！）

「あはは。ゴメン姫路さん。見間違いだったよ。」

「あれ、坂本君どうかしたんですか？」

「あ、ああ。雄二はあんまり姫路の料理がうまくてたくさん食って食休みだ。」

雄二は白目向いて泡吹いてるからそのいい訳は無理があると思う！！

「そうですか。ありがとうございます！あ、デザートもありますよ。」

「「「「！？」」」」」

…どうしよう…。

「あ！スプーン忘れちゃいました！今、持ってきますね！」

よっしゃ！少し首が繋がった！

「どうしようか。雄二、食べる？」

「ふざけるな！これ以上は俺が一生ものを食べなくなる！」

「しょうがねえ、明久。腹決めて食べ。」

「……今までありがとう。」

「仕方がない、ワシが食おう。」

秀吉！？そんな、無茶だ！

「女の子にそんなことさせられない！」

「ワシは男じゃ。それにワシの腹なら毒ぐらいは中和できる。」

なんて丈夫な胃袋だ。

だが秀吉がここまで言うなら任せるしかない！

「お願いね、秀吉！」

「ああ、むぐむぐ。なんじゃ、なかなか美味い…ごぼっ」

自称…鉄の胃袋は泡を吹いてぶっ倒れていた。

「雄二」

「どうした。」

「無理矢理食べさせてすいませんした。」

僕達は地面に額をこすりつけんばかりに土下座した。

第5問（前書き）

問1. good、badの比較級、最上級を答えなさい。

姫路瑞希の答え

『good — better — best
bad ? worse ? worst』

教師のコメント

その通りです。

吉井明久の答え

『good — gooder — goodest』

教師のコメント

まともな間違い方で驚いています。

goodとbadは『er, est』をつけるだけではダメです。

土屋康太の答え

『bad — butter ? bust』

教師のコメント

『悪い — 乳製品 — おっぱい』

真生梨央の答え

『good』

教師のコメント

『神』

第5問

「さて、次はBクラスだ。」

雄二は唐突にそう言った。

「雄二。いきなりBクラスは無理があるぞ。」

陸生の言葉にクラスは『そうだ、そうだ。』と騒ぎ立てる。

「大丈夫だ。俺たちはできる。」

「雄二、いくらなんでも無理だよ。相手はBクラスだよ?」

Aクラスほどじゃないけど、それでも人並み以上の学力を持った人たちの集まりだ。

「それに、じゃ。代表はあの根本恭二じゃぞ。勝利には少々難しいと思われるのじゃが。」

根本恭二。

Bクラス代表。その性格の悪さもさながらクラス内でも支持するものは少ない。

恐らく試召戦争もなにか汚い手で来るにちがいない。

「はい!代表!!」

「どうした?真生。」

「お昼ご飯はまだですか!」

「帰れ。」

真生さんは相変わらずマイペースだなあ。

「でも，なあ…。」

「忘れたか？こっちにはAクラスに匹敵する姫路がいるんだぞ？」

…そうだよ！こっちには姫路さんがいるんだ。

Bクラスにもそうそう遅れは取らないだろう。

「やれるか？姫路。」

「え！？あ，はい！頑張ります！」

「じゃあ，明久。行ってこい。」

「は！？」

ふざけるな。

この前，僕がどんな目にあったか忘れたとは言わせないぞ！

Eクラスに行ったら，ものすごい勢いで殺されると思ったんだ！！

「じゃあ明久。恒例のアレで雄二と決めたらどうだ？」

恒例のアレ。

それは…『あっち向いてホイ』

「行くぞ！雄二！！」

「来い！明久！！」

「ジャンケン！」

「「ポン！」」

グー《僕》 VS パー《雄二》

しまった。これは僕の負けだ。

「あっち向いて…」

ドスッ。

あれ？雄二。指出すところ違くない？

「ぐああああ！目がああ！」

「ほれ。俺の勝ちだ。」

くそ！昔から雄二の使う手だ。

「待て！これは勝負じゃないぞ！」

「ふざけるな。これはれっきとした勝負だ。」

「技あり、雄二の勝ち。」

くそ！これもいつものパターンだ！！

「さ、行ってこい。」

むう。仕方ないな。行ってやるよ。

間。

「またも死ぬかと思った!!」

「生きてて良かったね!」

まあ、これでBクラスとの勝負は嗅ぎ付けたからいいか。
決戦は明日!

「ねえねえ、ミズちゃん。」

「どうかしました? 梨央ちゃん。」

「私、よく分かんないから勉強教えてよお。」

「はい♪あ、でしたらみんなで勉強しましょうか?」

「お、そりゃいいな。」

「…………同意。」

「うむ。ワシも勉強をしておきたいしの。」

「ウチも参加するわ!」

「俺も行くよ。」

「僕も行く!」

結局は全員参加に。

とりあえず図書室へ移動した。

「7をXに代入すればどうなりますか?」

現在、姫路さんに勉強を教えて貰っている僕達。

流石の姫路さんも僕達に教えるのは難しいようだ。(特に真生さん)

「えーと、……………空が青いね。」

「誤魔化さないでください、梨央ちゃん?」

「だゝってわっかないよお！（泣）」

とうとう本気で泣き出してしまった。

「つゝ。えっと、太平洋戦争中に使用された原子爆弾の名称……？」

「……………第1段階 第一次性徴期（第一次性徴は性別差なし）」

第2段階 乳輪下に脂肪組織が蓄積し始める。乳頭、乳輪（乳暈）が広くなり、乳首・乳輪の色が変化。（定義上では、ここから思春期）

第3段階 脂肪組織が蓄積し外見差が出てくる

第4段階 乳輪が隆起し、ほぼ成人型になる

第5段階 女性成人型となる

乳房容積の9割が脂肪で、1割が乳腺。脂肪組織の形は人種差や個人差あり。脂肪組織の盛衰により大きくなったり、小さくなったり変化。また高齢になると乳房の中身が徐々に衰退し下垂していく。」

「原子記号……」

ムツリーニは相変わらず保健体育の物わかりはいいな。

これなら明日に迎えるBクラス戦。大丈夫そうだ。

第6問（前書き）

問1. 次の日本語を英語にきなさい

『地獄』

姫路瑞希の答え

『hell』

教師のコメント

正解です。この単語は間違えやすいのですがよく正解しましたね。さすがです。

坂本雄二の答え

『hill』

教師のコメント

かなりおしいですね。これでは『丘』という意味になってしまいましたね。次は間違えないようにがんばってください。

小乗陸生の答え

『tell』

教師のコメント

この回答を見たとき、私は思わず自分の携帯電話を見てしまいました。

吉井明久の答え

『hello』

教師のコメント

はい、こんにちは。

※涼風かえで様からの発案問題です。

第6問

「さあ、今日はBクラス戦だ。抜かりはないな？」

「大ありじゃー。」

「そうか。じゃあ、真生は即刻立ち去ってくれるか。」

真生さん……。流石にそこでそのノリはないよ……。

「今回の作戦は姫路を押し立てて行く。ウチの主戦力だからな。よって防衛部隊は秀吉、陸生率いる第2，3番隊だ。」

チャイムが鳴る。開戦の合図だ。

「総員，出陣だ！自信のある教科担任を連れて責め立てろ！！」
『おおー！！』

雄二の合図にみんなは出陣する。

姫路さんはすぐに走って行って前線に出た。

「Fクラス，姫路瑞希。Bクラスに試召戦争を申し込みます！」

「承認します。」

先生の合図に召喚フィールドが形成される。

「試験召喚獣，召喚！試験召喚！！」
サモン

そして、足下に魔法陣が発生。本人を小さくしたような召喚獣が登場する。

流石はAクラス並の実力を持つ姫路さんだ。敵がばったばったと倒されていく。

「姫路。大丈夫か？」

「はい、まだ行けます！」

大丈夫かな。姫路さん、今朝から体調悪そうだけど。

『吉井隊長。9番隊がやられそうだ。』

「分かったよ。6番隊の人は9番隊を救出に向かわせて。7番隊は6番隊の代わりについて。」

『了解。』

さて、僕も指揮隊長としての仕事をしなくちゃ。

キンコンカンコンコン…。

下校のチャイム。

つまり、試召戦争中断の合図だ。

雄二は明日にまた続きをするって言ってたっけ。

「みんな。よく頑張った。続きは明日だ。ゆっくり休んでくれ。」

「雄二。今のうちに点数補給をしないと方がいいんじゃない？」

「いや、ダメだ。契約の中で『中断中は試召戦争に関する全ての行

為を禁ずる』とあるからな。」

「そっか。」

じゃあ、明日に備えて休むだけかな。

「雄二、陸生。久しぶりに一緒に帰らない？」

「ああ、いいぞ。」

「構わないぞ。」

下校中…。

「あ、忘れ物。」

「ったく。お前はそれだから明久なんだ。」

「え。何それ。」

明久―『バカ』の意。

例文―彼は本当に明久な行いをした。

「なんて不名誉な!!」

「仕方ないだろう。いいから忘れ物取って来いよ。」

「くうう。しょうがないな。2人とも先に帰っていいよ。」

「無論そのつもりだが？」

「誰がお前なんかを待つか。」

お前達に優しさというものはないのか。

僕はそのまま学校へ向かった。

「？ あれ姫路さん？」

「あわっ！？よ，吉井君！？もう帰ったんじゃない…。」

「あ，うん。実は忘れ物をしちゃってね。」

姫路さんがあわてて後ろに隠したのは…手紙？

そういえば最近，姫路さんは雄二と仲がいいような…。

僕の中に沸々とわき上がる何かを感じた。

『おいおい，ありゃあどう見てもラブレターだな。』

…出たな！僕の中の悪魔！！

「あ，…あの…。」

「…変わった不幸の手紙だね？」

『コイツ認めない気だ！？』

「いえ！不幸の手紙なんかじゃないです！！」

「そっか。姫路さんにとっては素敵な人だもんね。…呪いの魔法陣なら教えてあげるよ？」

「い，いりません！」

「でも，あんなヤツのどこがいいの？」

「えっと…，中身もいいところとか…。」

「ああ。内臓とか強そうだもんね。」

「いや，そっちじゃなくて。すっごく優しくて，格好いいところで
す。」

「へえ。」

雄二って確かに優しいもんな。姫路さんが惚れるのも解るかも。

「てことは外見もいいの？」

「はい！みんな噂してますよ！美少年の吉井君と格好いい坂元君は2人だと絵になるって！」

「そっか。大切にしてあげてね。その友達。」

「はい。あとどっちが受けてどっちが攻めだろう、とも…。」

「すぐに縁を切りなさい。」

僕と雄二が…。おえっ。

あー、そんな考えは捨てるんだ！

「頑張ってね、姫路さん？」

「はい！」

そして姫路さんはぱたぱたと行ってしまった。

少し頬を朱に染めて。

…うん。きっと夕焼けでそう見えたんだ。

「さて、僕も帰んなきゃ。」

その前に雄二の教科書に卑猥な落書きでもしておこう。

ただで済むとは思うなよ！！

翌日…。

「ふわりあ。いい朝だな。」

さてつと携帯，携帯。

「？ あれ，いっぱいメールが来てる…。」

メール…ブッコロス

メール…ブッコロス

メール…ブッコロス

メール…ブッコロス

メール…ブッコロス

メール…ブッコロス×100

「…雄二？」

あれ？最後のメールは内容が違うな。

メール…外出には気をつけろよ。

何！？何されるの！？

メール…陸生の両親が外国の土産でモデルガン（スナイパーライフ）を持っているらしい。

「くそ！陸生も絡んでるのか！！」

ガシャアッ

「え…。」

今，ガラスが割れた…。しかもBB弾型に…。

近くのマンションからちらりとキラツと光るモノが見えた…。

「クソッ！家にいるのは危険だ！」

僕は急いで外に出た。

今日は決戦！！

第7問

「開戦だ！」

『おぉー！』

迎えたBクラス決戦の日。

Bクラス相手にも善戦したかに見えたが…。

『5番隊がやられた！』

「3番隊が押されている!!」

やはりこれは無理があった。

「とにかく点数の少ないのはすぐに補給に!!」

仕方ない、これは僕も下がらざるをえない。

「僕は一端下がる!秀吉、指揮は頼むよ!」

「了解じゃ!」

とにかく今は点数補給をして前に出ないと!

…って、アレは姫路さんに…根本君?

空き教室には姫路さんと根本君が何やら話していた。

アレって…手紙!

姫路さんの雄二宛のラブレター!?

「おう，どうした明久…ってスゴイ形相だな。」

「根本オオオオオ！！」

許さない！

人の恋路を邪魔するなんて！！

とにかくすぐにラブレターを取り返して…。

いや，暴力沙汰を起こせば即刻試召戦争は中止だ…。どうすれば…？

教室

「雄二！」

「おう，明久か。どうした？」

根本君は姫路さんのラブレターを制服のポケットにしまっていたから…！

「根本君の制服がほしいんだ！！」

「…そうか。」

「雄二！？頼むからそんな悲しい目で僕を見ないで！！」

おかしい。変なことは言っていないはずなのに…？

「まあ、いいだろう。交渉の際に言ってみよう。」

「ありがとう。…あと雄二。」

「なんだ？」

「姫路さんは作戦から外してほしい。」

「何故だ？」

「っ！そ、それは…。」

下手に言えば姫路さんの恋路を邪魔することになる。

だが、このままでは姫路さんの秘密が根本によってばらされてしまう…。

「今回、姫路には奇襲作戦を担当して貰うつもりだったが…お前がやるなら別だ。」

「え？」

「できるのか？」

「…失敗したら？」

「失敗はするな。それだけだ。」

姫路さんがやる役、といえぱおそらく敵の大將を討つこと。

しかし、僕のこんな点数でBクラス、しかも代表クラスにかなうはずがない。

でも…！

「やるよ！雄二！」

「そうか。頼む。」

Bクラス横，Dクラス。

「どうしても，ですか？」

大島先生は僕と島田さんを交互に見ていた。

「ええ。今日こそは決着をつけないといけないんです。」

「そうです。吉井には日頃から溜まっているストレスをぶつけなければいけないんです。」

「でしたら，何もDクラスでする必要は…。」

「ダメですよ。僕の召喚獣はものに触れるからFクラスだと壊れちゃいます。」

ここには僕と島田さん，大島先生にムツツリーニがいる。

「では，開始！！」

先生の合図を元に僕達の決闘は幕を上げた。

「でえええい！！」

すぐに突っ込むが島田さんの召喚獣は軽くかわし，壁を叩く。

「まだまだあ！！」

しかし、また壁を強打するだけだった。

「くそ！あともう少し…！」

あと少し！！

そのころBクラス。

「っ！」

『田川，討死だ！』

『万事休すか…。』

「まだだ！諦めるな！」

現在のバリケードは陸生を入れた5人。

これで突破されていないのはかなりすごいことだ。

「くそっ！点数補給に戻ろうにも，今戻れば…！」

恐らく今戻ればあつという間にバリケードは突破されてしまい，代表…坂元雄二の首は取られるだろう。

まともな点数補給もままならないままバリケードはどんどん崩れる。

「よう。」

「なっ！？雄二！？」

『何故坂元がここに！？』

いきなり現れた大将に味方も戸惑っている。

当然だ。こんな防戦一方の状態で戦線に出るなど首を取られに来たようなものだ。

「どうした。Fクラス代表。負けを認めに来たのか？」

根本はいかにも悪党のような笑いを漏らし、雄二を見ている。

「いや、もうすぐ終戦なんでな。様子を見に来ただけさ。負け犬のな。」

「何い!？」

「さ、もういいだろ？明久!!!」

その瞬間、Bクラスの壁は破壊され、そこには吉井明久と島田美波の姿があった。

「くくく。そいつは【観察処分者】だろう？こんなところによこしてどうするつもり…」

「あとはヨロシクね。ムツツリーニ」

「え?」

「Fクラス、土屋康太。Bクラス代表根本恭二に保健体育勝負を申し込む。」

表示される点数は……

保健体育	土屋康太	VS	根本恭二
462点			387点

「……………終わりだ。」

ドン！！！！

今、ここにBクラス戦は終結した。

第8問（前書き）

問1. 以下の問いに答えなさい

『女性は一（ ）を迎える事で第二次成長期になり、特有の体付きになり始める。』

姫路瑞希の答え

『初潮』

教師のコメント

正解です。

吉井明久の答え

『明日』

教師のコメント

随分と急な話ですね。

土屋康太の答え

『初潮と呼ばれる生まれて初めての生理。医学用語では、生理の事を月経、初潮の事を初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が1.5kgに達する頃に初潮を見るものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均12歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境栄養状態などに影響される。』

教師のコメント

詳しくすぎです。

真生梨央の答え
『年頃』

教師のコメント
そうですね…。

第8問

「さて、俺たちの勝ちだったな？」

「くそっ！まさかFクラスにあんな強者がいるなんて…。」

ムツツリーニは保健体育の成績はずば抜けて良い。

だからこそ、雄二の指示により、待機して貰っていた。

「さて、俺たちは今お前達の教室と入れ替わるわけだが…。」

ついにBクラスの設備が手に入る。

Aクラスまでは行かなくても普通の学校よりはかなり良い設備だ。

「特別にナシにしてもいい。」

「「「「は？」「」「」「」」」」

「もちろん、こちらの要求は聞いて貰う。」

「う…なんだ？」

「代表はこれを着るんだ。」

雄二が差し出したのは女子生徒の制服。

「ふ、ふざけるな！俺がそんなもの着るわけ」

『必ず着せてみせるよ!!』

『それでクラスを交代しなくていいなら喜んで!』

『クラスで総力を挙げてやってみせる!』

『他になにかあるか!? なんでもやろう!!』

根本君は早速襲われている。

とにかく目的のものは手に入った。

さて、この制服はどうしよう…？
焼却処分しておこう。どうせだから家までその制服の着心地を楽しんで貰おう。

「よし、次は記念撮影だ。」

雄二のヤツ完全に遊んでるな。
えっと、姫路さんは教室にいるって言ってたな。

Fクラス。

「姫路さん。いる？」

「え？ 吉井君？」

姫路さんは少しばかり寂しそうに座っていた。

「姫路さん、この手紙。落ちてたよ？」

「あ、ありがとうございます！！」

「ううん。お安いご用だよ。」

暫しの沈黙。

「あの…。これ、本当は捨てたつもりだったんです。」
「え？」

「やっぱり、手紙じゃなくて直接伝えた方がいい、と思ったんです。」

「そうだったんだ。うまくいくといいね。」

「はい！」

明久宅。

「~~~~っ！今日は疲れたなあ！」

「まったく、なかなか明久らしい作戦を立てたな。」

「あれ、僕褒められてる？」

「いや、ものすごい勢いでバカにされてるな。」

「陸生、この野郎！」

しかし、すぐに僕の目が突かれる。

「ぐはあっ！！」

「まったく。お前らそこら辺にしておけ。メシ食うぞ。」

そして雄二が用意したもの。

- ・寿司
- ・お好み焼き
- ・刺身
- ・カレーライス
- ・緑茶
- ・コーヒ―
- ・紅茶

「俺は寿司とお好み焼きと緑茶を食う。」

「俺は刺身とカレーとコーヒ―。」

「ちよつと待てえ！僕は紅茶しか飲めないじゃないか！！」

「そんなわけないだろ。」

あ、そうなんだ。きちんと別のもの用意してくれて…

「紅茶は俺が帰って飲む。」

「お前はビニールでも食つとけ。」

「食べれるか！！」

折角良い気分で終われると思ったのに…。

第9問（前書き）

問1. 以下の問いに答えなさい

『人が生きていく上で必要となる5大栄養素をすべて書きなさい』

姫路瑞希の答え

『？脂質 ？炭水化物 ？たんぱく質 ？ビタミン ？ミネラル』

教師のコメント

正解です。

吉井明久の答え

『？塩 ？砂糖 ？水 ？雨水 ？わき水』

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです。

土屋康太の答え

『初潮年齢が十歳未満の時は早発月経という。また、十五歳になっても初潮がない時を遅発月経、更に十八歳になっても所長がない時を原発性無月経といい……』

教師のコメント

保健体育のテストは一時間前に終わりました。

真生梨央の答え

『?伊勢エビ ?エビ ?ザリガニ ?毛ガニ ?タラバガニ』

教師のコメント

好物なのですね。?が気になる所です。

第9問

小乗陸生視点。

~~~~~

初恋。

人によってそれぞれだろう。

俺の初恋は…小学3年生の時。

2000円もかけて取ったキーホルダーを落として探していた時のこと。

『これは君の？』

小さい頃のことだからおぼろげであまり覚えていない。  
でも、あれは確かに“初恋”だったと思う。

「ほう……。」

「おはよう、陸生。」

「ああ……。」

「どうしたの？元氣ないね？」

いつも鬱陶しい明久がいつもに増して鬱陶しい。

「……………恋煩い？」

「ん。そうかもな。」

「「！？」」

「とにかくしばらく一人にしてくれ。」

この季節はあの時のことを思い出す。

俺の中に9年も住み続けている君は誰？

「よっす。」

「おはようじゃ。」

雄二も秀吉も来たんだな。

ムツツリーニはもう来ていたし、姫路と島田と真生も来ていた。  
これでいつものメンツが揃った、というところだな。

（ほう。陸生の初恋か。）

（な。気になるだろ？）

（しかし、陸生がおなごに興味があったことに驚きじゃ。）

（………というか人間に興味があったかどうかも驚き。）

あいつら、俺に聞こえないと思って言いたい放題言いやがって…。

「へえ〜。陸生君の初恋ですか〜。」

「陸生も人に興味があつたのね。」

島田は随分と度胸があるな。

まあ、俺は返り討ちに遭いたくないから何も言わんがな。

（陸生、話さないなら…。）

「何だよ。」

（姫路の手料理を食べさせてやろう。）

「全て話そう。」

俺だってこんなところで死ぬわけにはいかないからな。

説明中…。

「…てな感じた。」

「「へえ〜」。」

女共は目を輝かせている。

確か女はこんなシチュエーションが好きだ、と母親が言っていた。  
どんなシチュエーションだ。

「陸生にそんな事があつたなんて意外だな間接が逆の方向に折れ曲がるうううう！！」

いちいち腹立つやろうだ。

礼にコイツの全ての間接を逆方向に曲がるようにしてやろう。

ゴキリ。

「ぐわああ！腕の関節があああ！！」

「ま、そういうわけだからしばらく放っておいてくれ。」

…もう君のことが忘れられない。

君を見てから、もう他の異性なんて興味はなくなった。  
どこにいるんだろう…。



昼休み。

「しかし、妙なメンツで昼飯取ることになったモンだ。」

「さて、今日のご飯は塩と油だね。」

「またお前は…。」

相変わらず明久の食生活はどうなってるんだか。

今の俺にはどうでも良いけど。

「あ。」

「どうした？」

「いや、件の女子の特徴思い出した。」

「へえ。」

「夏に海で採った貝殻でネックレス作ってプレゼントしたんだ。」

「ほほう。お前にしては洒落たことしたじゃないか。」

「まあ、小さい頃の話だから今となっては腕輪になってるだろうな…。」

明久視点

放課後。

「忘れ物ゝっと。あれ、秀吉？」

「む、明久か。」

「どうしたの？」

「いや、随分と懐かしいものが見つかったの。」

「なになに？」

「これじゃ。」

それは…貝殻の腕輪(?)。

「な、なに？それ。」

「うむ。小さい頃に誰かに貰ったものじゃ。幼かったから誰だったかはすっかり忘れてしまっているの。いやはや懐かしい事じゃ。」

秀吉は遠くを見つめていたが僕としては気が気ではなかった。

翌日。

「陸生！」

「なんだ？バカ」

「お前にだけは言われたくない。」

「ちよっと来て！」

（実は…。）

僕は昨日聞いたことを全て陸生に話した。

「じゃ、じゃあ…俺は…！」

「うん。そうみたいだね。」

「秀吉をずっと思い続けていたのか…。」

「うん。仕方ないけど諦めるしかないよ。」

何より、秀吉をこんなケダモノの近くに置いておくなんてできない。そう、例えるならケダモノの檻の中に一緒に入れられた美少女…例えられない！！

「だが、諦めるなんてできない！」

「は！？」

「ありがとう！明久。今日だけはお前に感謝する！！」

その後、しばらく陸生と秀吉は目が合うとお互い顔が赤くなるけど  
まさかくつついたなんてないよね！？

## 第10問（前書き）

問1．バルト三国と呼ばれる国名を全て挙げなさい。

姫路瑞希の答え

『リトアニア，エストニア，ラトビア』

教師のコメント

正解です。

土屋康太の答え

『アジア，ヨーロッパ，浦安』

教師のコメント

土屋君の国の定義が気になります。

吉井明久の答え

『香川，徳島，愛媛，高知』

教師のコメント

正解不正解の前に数が合っていないことに違和感を覚えましょう。

小乗陸生の答え

『インド，清，イギリス』

教師のコメント

怪しい貿易が行われていないと信じたいですね。

## 第10問

「みんな、聞いてくれ。」

代表…雄二の声にみんなが反応する。

「明日，Aクラスと試召戦争を行う。」

『『『えええええ！？』』』

驚愕。当然だ。

はつきり言うけどAクラスには到底勝てそうにない。  
天と地の差とはこのことだろう。

「しかも，一対一の5人制だ。」

「何故だあっ！！」

大人数なら数にものを言わせれば億分の一の確率で勝てるかもしれない。

でも一対一なら話は別だ。

真の実力勝負となる。

「メンバーは，俺，姫路，明久，ムッツリーニ，真生だ。」

「僕も？」

「ああ。ちなみにこの勝負，負けた方は勝った方の言うことを聞くと翔子と約束した。」

「霧島さん？」

あの学年主席の霧島さんがそんな条件を呑むなんて…。

「なんで雄二は霧島さん呼びすてに？」

「アイツは俺の幼なじみだからな。」

「発射用意。」

僕の合図にみんなは雄二に上履きを投げる用意をする。

「まあ、落ち着け。」

「そうじゃ、一端静まるのじゃ。」

「どうして！陸生は悔しくないの！？」

「むう。明久，ワシは男じゃないのかのう…。それより相手はあの霧島じゃぞ？」

……密かに主席の霧島翔子さんは同性愛者ではないか，と言われている。

「確かにそうだと考えれば雄二に心配はないか。」

「問題は…。」

「姫路じゃな…。」

「はい？なんですか？」

霧島さんはいつも姫路さんを凝視している。恐らく…。

「うう，それは美味しいような嫌なような…！」

「落ち着け。そしてムツツリーニは正気を保て。」

見ればムツツリーニは畳を鮮血に染め上げ，見事な紅色仕様の畳が完成していた。

「とにかく，さっきの五人でAクラスと勝負だ！！」

翌日――。

「さて、遂にこの日が来た。俺たちの設備がAクラスになる日だ！  
！！」

『『『おおおおお！！！！』』』

「準備は良いね？みんな！」

「はい！」

「おおー！」

「……………（コクリ）」

「行こう。」

「開戦だ！！！！」



特別教室――。

「それでは、これよりAクラス VS Fクラス。

『エリート VS バカ』を開催致します。」

『『なんだとおっ!!』』』

司会の先生の言葉に一同は声を抑えきれない。  
ていうか、先生が生徒を侮辱するなんて……!!

「では時間も特に無いんで早速始めましょうか。では、最初は

木下優子 VS 真生梨央！」

「まったく、いちいち私を煩わせるなんて……！」

「まあまあ、堅いことは言いつこなしですよ。」

「「<sup>サモン</sup>試獣召喚!!」」

表示される点数は……。

現代国語 真生梨央 VS 木下優子

97点

ああ……。この点数じゃ勝ち目はないなあ……。

それに真生さんは召喚獣の扱いもなっていないし……。

現代国語 真生梨央 VS 木下優子

97点

413点

現れた召喚獣も装備は薄手の服に小型のナイフとRPGの盗賊を思

わせる格好だ。

それとは違い、木下さんの召喚獣は鉄製の鎧に突撃槍という重騎士を思わせる格好だ。

そのまま槍で一突き、あっさりと決着はついた。

「あっちゃあ。」

「これがAクラスとFクラスの格の差よ。」

「これで0対1か。」

今負けるのは辛い。

少しでも多く勝ち点を取っておきたいのに。

「明久、行け。」

「雄二……。今僕が行ったって……」

「お前の本当の力を見せてやれ。」

僕は一度フツと笑うと微笑を浮かべて雄二を見た。

「僕に本気を出せっていうの？」

「ああ、俺はお前を信じている。」

雄二の押しで僕の覚悟は決まった。

一歩、また一歩と前に出る。

「あなたが【観察処分者】の吉井君ですね。一瞬で終わらせてあげますよ。」

「できるかな？ 実は僕は……」

僕は左手を前に突き出して言った。

「左利きなんだ。」

——キュボツ

「テストの点数に利き手は関係ないでしょうがああああ!!」

直後、島田さんの4の字固めが見事に決まった。

「ぐああああ!!フィードバックと実際の痛みで死にそうだ!」

「開放してほしいなら週末にクレール奢るって約束しなさい!!」

「是非そうさせて貰いますっ!!」

今は僕の命が一番だ、これで僕は一命を取り留め：

「それからウチはあんたのこと『アキ』って呼ぶから!」

「どうぞ!だから早く開放して!」

「ウチのこと『愛してる』って言って!!」

「ウチのこと愛してるって言ってえっ!!!!!!!!!!」

『』『』……………『』『』

バキリッ

「これで0対2か。キツイな。」

「ていうか雄二！？僕のこと信じてるって言ったよね！？」

「勝つほうに信じたワケじゃない。」

「このやろおっ！！！！」

「次は、ムツツリーニ。行ってくれ。」

「……………（コクリ）」

ムツツリーニもまた一歩一歩と前に出る。

対するAクラスは髪をショートカットにして、胸が無くていかにも『男子』みたいな娘だ。

「やあ、君がムツツリーニ君だね？」

「……………誰だ。」

「ボクは工藤愛子，ヨロシクね。あ，君って保健体育が得意なんだよね？教科は保健体育で良いのかな？」

「……………問題ない。」

「ボクも得意なんだ。君と違って」

「実技でね。」

「……………（ブシャアアアアアア！！）」

それを聞いてムツツリーニは鼻血を思いきり吹き出した。虹ができ

るほどに。

「ムツツリーニイイ！！」

くそっ。なんて卑怯な攻撃を…。

「ムツツリーニ君，もう戦えないみたいだね。だったら吉井君，君が相手する？でも勉強苦手そうだね。ボクで良ければ教えてあげようか？もちろん…」

「実技でね。」

「……………（ブシャアアアアアアアアア！！！！）」

「大丈夫か…？」

「とっくの致死量を超えておるはずじゃがの。」

くっ。確かに僕の学力じゃAクラスに敵わない。

仕方がない…。

「仕方がな「アキには必要ないわよ。」

「そうですっ！吉井君にはそんな機会，永遠にありませんから！」

「おい，明久が死ぬほど悲しい顔してるぞ？」

やだなあ，永遠に必要ななんて2人とも大げさだな。

「……………まだっ，行ける…！」

「ムツツリーニ！」

顔を鮮血に染めながらも立ち上がってくるムッツリーニ。  
今日のMVPは間違いなく彼だ。

「<sup>サモン</sup>試獣召喚!!」

呼び出されたのはいつもの見慣れたムッツリーニの忍者風召喚獣。  
対するは、身の丈の倍はあるごつい斧を構えた召喚獣。

保健体育      工藤愛子      VS      土屋康太

447点

「400点オーバー!?!」

「反則的な強さね…。」

保健体育      工藤愛子      VS      土屋康太

447点

569点

「おおっ! ムッツリーニの方が点数が高いぞ!」

「……………加速」

ムッツリーニの声に召喚獣は加速、見えない動きで小太刀を抜き、  
工藤さんの召喚獣を切り裂いた。

「……………加速、終了。」

———キュボツ

『『『オオオオオオオオ!!』』』

「これで1対2か。」

「スゴイよ！ムッツリーニ！」

「……………（グッ）」

「よし姫路，頼めるか？」

「あっ，はい！頑張ります！！！」

対するは，学年次席…久保利光君。霧島さんに次ぐ強敵だ。

『では，科目は？』

「総合科目でお願いします。」

「なっ，勝手に決めるなよっ！！！」

「いいですよ。」

「姫路さん！？！」

「<sup>サモン</sup>試獣召喚！！！！」

床に幾何学的な魔法陣が現れ，召喚獣が現れる。

|      |       |     |       |
|------|-------|-----|-------|
| 総合科目 | 久保利光  | V S | 姫路瑞希  |
|      | 4754点 |     | 5127点 |

「何！？この点数，学年主席に匹敵するぞ！？Fクラスになんてこんなヤツが！」

「私，このクラスが好きなんです！だから頑張ろうって決めたんです！！！！」

——キュボッ

「これで2対2，同点だ。」

「すごいや雄二！ここまでできるなんて！！！」

「ああ、後は俺と翔子と俺の勝負だ。」

「……………勝ってくれ。」

「ああ、任せてくれ。」

グッドサインをするとそのまま前に出た。

『では科目は何にしますか?』

「歴史だ。内容は小学生レベル、100点満点の上限有りだ。」

『『何!?』』

『では問題を作りますのでしばらくお待ちください。』

おかしすぎる! 相手はあの霧島さん。小学生レベルなんて100点取って終わり、引き分けになるじゃないか!!

「雄二、何考えてるの!」

「俺なりに策があつてのことだ。いいか? 大化の改新、いつあったか覚えてるか?」

「バカにしないでよ。『鳴くよウグイス、大化の改新』794年だよ!」

「『無事故の改新』645年だ。」

あ、あれ。なんで僕を可哀想な目で見るのかな…。

「だが、あいつは『無事故の改新』625年と覚えている。そこに賭ける。」

「つまり…。」

集中力と運の勝負って事か…………。



『では始めてください。』

「頼むよ。雄二…。」

次々と問題が表示されていく。  
その中に…

問・大化の改新は何年に起きた出来事か答えなさい

「か、勝った…？」

『』『やったあああああ！！！！』』』』

これで遂に僕達の机がシステムデスクに！！

『では得点を発表します。霧島翔子，97点。』

やった。これで，遂に——

『坂元雄二，53点。』

――は？

僕らの机が、みかん箱になった。

「何してるんだよ雄二！！」

「いかにも俺の実力だ。」

「100点取れなかったら意味ないだろ！！！」

「まあ良いじゃないですか。私この教室好きですよ？」  
「でも……。」

「それより、アキ。クレープ食べに行きましょ？」

「いや、それ週末の話で……。」

「今日は今日、週末は週末！」

「だめですよ。吉井君は私と映画を見に行くんです！」

「姫路さん！？それは話題にすら上がってないよ！！」

「僕の栄養がああ！食費がああ！！」

パシン。

戸を閉め、3人は去った。

「あれで気付いておらんとは明久もたいしたものじゃな。」

「…………鈍感。」

「まったく、呆れるよな。」

「おっかしいなあ。」

「ま、アイツらしいよな。」

しばらく公園の水道に厄介になることになりそうだ。

## オリキャラ紹介

真生 まやみ 梨央 りお

Fクラス所属

基本的にお気楽な性格で食べることが大好き。（甲殻類は特に）  
2年になると同時に転校，一人暮らしで明久とはお隣さん。  
趣味は釣り（近所の池でのザリガニ密漁）で嫌いなものは勉強。  
ヒーローものもわりと好きだがそこまで好きと言うほどではない。  
頭の回転は悪いが，勘は割と鋭く瑞希や美波の恋心も見抜いている。  
人にあだ名を付けることが得意でその人の名前や名字から取ることが多い。

成績はお世辞にも良いとは言えず，明久よりは少しだけ良いという  
感じで最低に近い。

羞恥心というものを持ち合わせておらず，胸の大きさを指摘されても  
『わたしAだよ。』

と気楽に返してくる。怒っている様子も見えない。体育の授業は男  
子がいるにもかかわらず着替え始めるなど，Fクラスにとっては非  
常にありがたい人材である。

召喚獣は小型ナイフに薄手の鎧という盗賊装備である。

小乗 しょう 陸生 りくせい

Fクラス所属

何事もめんどくさがりの冷え切った性格。  
好きなことは特にない，嫌いなものは野菜類。

去年から明久、雄二とともに問題児として警戒されている。

その性格ながら喧嘩も多く、現在、【観察処分者】候補の一人。

家は割と金持ちであるが、本人は普通の生活を臨んでいる。

勘は鋭く、頭の回転も雄二の次に早い、そのため悪知恵もはたらく。成績はFクラスの中では良い方で（しかし全体から見れば悪い方）あるがどうもテストで結果は出さない。そのため召喚獣の装備も悪い。

秀吉が初恋の相手という少々可哀想な過去があるが、今はすっかり友人として接することができるようになったが、今でもまだすこし意識してるとかしてないとか。

召喚獣は改造学ランに釘バットという不良装備である。

## 第11問（前書き）

問・キリスト教の伝来は何年の出来事か。

霧島翔子の答え

『1549年』

教師のコメント

正解です。特にコメントはありません。

坂本雄二の答え

『冬の日，寒さに震える君の手を握った1993年』

教師のコメント

ロマンチックな表現をしても間違いは間違いです。

真生梨央の答え

『1192年』

教師のコメント

いい国作ろうキリスト教伝来。

## 第11問

「はぁ……………」

「おう、明久。どうだった？」

「うん…。しばらく公園の水が主食になるくらいだよ…。」

「苦勞してるんだな…。」

まったく、お金がある人たちは羨ましいよ。

「あ、そういえば昨日の話はどうなったの？」

「ああ、これからだ。」

雄二の声とともに襖が開けられて、学年主席の霧島さんが来た。

「お、来たな。翔子。」

「……………約束。」

「ああ、分かっている。『負けた方は勝った方の言うことを聞く』  
だろ？」

そういえばそうだった……………。

ってことは霧島さんは姫路さんを…!!？

「（カチャカチャカチャ…!!）」

ああ、ムツツリーニ。君も僕と同じなんだね!!

「雄二、私と付き合って。」

『『はぁ?』』』

刹那、放たれた言葉。  
それは僕の予想と：

「僕の予想と360°違うじゃないかあっ！！」

「いや、それ一周してるぞ。」

「つまり変わっておらんということじゃぞ…。」

どういうことだ！？雄二が霧島さんに告白されるなんて…。

「やはりか…。お前、まだ諦めてないのか。」

「私の気持ちはずっと前から変わらない。」

「拒否権は？」

「ない。」

最後の冷徹な言葉が全てを物語っていた。

つまり、霧島さんは初めから勝つ自信があってこの条件ごと呑んだ。  
目的を達成するために…。

「やれやれ、お前には困ったもんだな…。」

「…雄二。今は放課後。時間はあるから映画を見に行く。」

「んなっ！待て！やっぱり約束は無しにしてぐぎやああああああ  
！！」

抵抗も虚しく連行される悪友を見て僕らが敬礼をしたのは言うまでもない。

そして、僕らの心が一つになった。

（（（死ぬなよ……。））））

そしてついでに……



（（帰ってきたら、無事だと思うな……。））

もてない男の恨みは恐ろしいゾツ★

「さて、俺たちも帰るか？」

「…………俺はやることもある。」

「あれ？ムツツリーニは帰らないんだ。なら僕達だけで帰ろうか。」

ムツツリーニが学校に残るなんておかしいな。

まさか…

（ムツツリーニ。まさか……。）

（ああ。そろそろムツツリ商会を開くための材料が整った。）

ムツツリ商会。

知る人ぞ知る，ある意味危ない店。

女生徒の写真を売り，ムツツリーニが資金を稼ぐ，裏の会社。  
それがムツツリ商会。

（よし，だったら僕もすぐに…）

（順番がある。プライバシーを守るのが鉄の掟。）

（そうだった…。ゴメンよ。）

（順番になったら呼ぶ。）

ムツツリーニ視点

~~~~~

~~~~~

客A

「俺には姫路さんを5枚くれ。」

「…………了解。」

「あとアキちゃんもくれ。」

「…………了解。」

客B

「すみません、私にはアキちゃんを5枚ください…。」

「まいど。」

久○利○ 改め 客C

「アキちゃんを20枚だ。」

「どうも。」

姫○瑞○ 改め 客D

「すみません…アキちゃんを30枚頂けますか？」

「はい。」

島○美○ 改め 客E

「えっと…アキちゃんを3ダースもらえる？」

「まいど。」

吉井明久 改め バカ

「扱い酷くない!？」

「用件は？」

「あ、うん。えっとね、秀吉を25枚と姫路さんを20枚、美波を5枚と、真生さんを10枚。」

「合計額はかなり高額。」

「大丈夫さ。仕送りあったし、繋いでみせるよ。」

「……………まいどあり。」

小○陸○ 改め スポンサー

「やってるな、ムツツリーニ。」

「うわっ、陸○。」

「違う。今はムツツリ商会スポンサーだ。」

「そっか、陸○がムツツリ商会のスポンサーだったんだ。」

「……………彼には世話になっている。」

「確かに、高級な道具いっぱい持ってるもんね。」

「俺が、こうして続けていられるのもスポンサーのおかげ。」

「そうか、役に立って嬉しいよ。あ、秀吉を94枚貰おうか。」

「スポンサーは特別にタダ。」

「悪いな。」

ムツツリーニは少年少女に潤いと癒しをあたえるために日夜、戦っている。

〇〇〇〇 改め 客F

「こちらの島田美波を全部いただきますね？」  
「まいど。」

## 第12話（前書き）

校内アンケート

今、あなたが一番ほしいものは何ですか？

姫路瑞希の答え

『クラスメイトとの思い出』

教師のコメント

なるほど、お客様の思い出そういった出し物をいいかもしれませんね。

土屋康太の答え

『Hな本（訂正） 成人向けの本』

教師のコメント

訂正の意味はあったんでしょか。

吉井明久の答え

『カロリー』

教師のコメント

君の解答に生命の危険が感じられます。

霧島翔子の答え

『坂本雄二』

教師のコメント

霧島さん、坂本君はものではありません。先生は貴方たちの未来が心配です。

坂本雄二の答え

『自由』

教師のコメント

今回ばかりは、坂本君の言うことがなんとなくわかるような気がします。大変でしょうがこれからがんばってくださいね。

## 第12話

桜の花びらも散り始める時期。

僕達の文月学園は初めのビッグイベントが開始されようとしていた。そう、

「清涼祭だ。」

春の文化祭，【清涼祭】だ。

それにしても雄二のヤツときたら：

「ま，あとは実行委員に任せるから好きにしてくれ。実行委員は島田な。」

さっさと壇上から降りて端の方に避けてしまった。

まったく，雄二は昔から興味の無いことにはとことん無関心なんだからなあ。

「なんでウチが抜擢されたのかしら：？ま，いいわ。」

確かに島田さんはみんなをまとめるのは上手そうだ。これなら清涼祭の出し物も上手くいくかもしれない。

「じゃあ，副実行委員を決めるわ。誰がいい？」

『『吉井だな。』』

なんで一も二もなく僕が抜擢されたんだろう：。

「じゃ，今からウチが黒板に書く中から決めてね。」

【? 吉井】

あ、僕だ。

【? 明久】

これも僕だ。

「このうちの2人から決めてちょうだい。」

「ってどっちも僕じゃないか!!!!」

どっちに転んでも僕にしか決まらない。

畜生!!

『どっちにするか?』

『どっちもクズだからなあ…。』

「こらあっ!!そこ、僕の存在を否定しなあい!!!!」

まったく、なんてクラスメイトだ。

しかし、どのみち僕が抜擢されてしまったから仕方ない。  
僕は壇上に上がった。

「さて、みんな。何か案はある?」

「はい。」

「何? 梨央。」

真生さんが挙手した。

いつもは奇想天外な発言をするけど、こういうときは何かおもしろい案を出してくれるかもしれない。



「清涼剤って何ですか？」

「携帯で調べられるはずよ。調べなさい。」

ホントにおもしろいや…。

おもしろすぎて笑いしか出てこない…。

「はい。」

「はい，土屋。」

我らがムツリーニこと，土屋康太。

彼ならきつと僕ら男子陣に嬉しい提案があるかもしれない。

「………写真館」

「土屋の言う写真館ってかなり怪しい匂いがするけど…。ま，いいわ。アキ，書いておいて。」

「あ，うん。」

ムツリーニの写真館か。

嬉しいけど，女子陣にはあまり歓迎されないだろうな。

だって，盗撮写真だし。覗き部屋とも言うけど。

えっと，

【？写真館 『秘密の覗き部屋』】

これでいいかな。

まったく，このチョークは書きづらいや。

「じゃあ，次。」

『俺はウエディング喫茶を提案する。』

「何，それ。」

『まあ，いわゆるメイド喫茶のウエディングバージョンだ。斬新だろ。』

確かに。意外性があるな。

『しかし，これは男性に都合が悪くないか？ 人生の墓場とか言うしな。』

「はいはい，静かに！ アキ，今のも一応書いておいて。」

【？ウエディング喫茶 『人生の墓場』】

やれやれ，書きづらいチョークだな。

早く設備を向上させないと。

『はい。』

「はい，須川。」

『俺は中華喫茶を提案する。』

「中華喫茶ってやっぱりチャイナドレスとか着るの？」

『いや，そんな嫌らしい目的じゃなく，お茶とお菓子などを提供する店だ。そうだな，飲茶とか団子とかだ。そもそも，食の起源というのは中国にある，といわれているからな。そういう意味でもやはりヨーロッパ文化というのは……。』

知らない単語のオンパレード。

須川君がこんな勉強熱心だなんて意外だ。

「何やってるの，アキ。さっさと須川の意見書きなさい。」  
「：うん。」

とりあえず頭に残ってる単語で繋ごう。

【?中華喫茶 『ヨーロッパ』】

これでいいのかな…?

「お前ら、しっかりやってるか？」

西村先生，通称鉄人。Aクラスとの試召戦争に負けた僕達の担任になった。

そして黒板に書かれた文字を見て僕らを見渡していた。

「補修の時間を増やした方がいいかもしれんな。」

『嘘でしょ!?!』

『僕らじゃなくて吉井が勝手に!?!』

『僕らは悪くありません!?!』

「友達を売ろうとするな!?!!」

友達に罪をなすりつけるなんてなんてクラスメイトだ!

「先生は吉井を副実行委員に選んだことをバカだと言っているんだ!」

同級生ならシバいてるところだ。

「まったくお前らは…。稼ぎを出して設備を向上させようとか思わんのか？」

『『『………』』』

『そうだ！その手があった！！』

『なにも試召戦争だけが設備向上のチャンスじゃない！！』

鉄人の一言でみんなに火がついた。

そもそもみんな、クラス設備に不満があって試召戦争を起こしたんだ。

不満が出ないわけない。

『だったらやっぱり写真館か！』

『いや、ウエディング喫茶もいいと思うぞ。』

『中華喫茶もかなり稼ぎは出せると思う！』

『カジノとかはどうだ！』

『いやいや、お化け屋敷も行けるぞ。』

まずいな。逆に意見がまとまらない。

「はいはい、静かに！」

と、ここで美波の出番だ。

反抗する者は眼力で押さえつけて、しゃべり出す。

「とにかく！この中の3つから選びなさい！こうでもしないと始まらないわ！！」

「はい！写真館がいい人！ウエディング喫茶がいい人！中華喫茶がいい人！」

「——はい！中華喫茶に決定！みんな協力するように！！」

結局多数決で決まった。だが美波の判断は正しかったし、雄二の人选も間違いじゃなかったって事か。

やっぱりアイツはスゴイヤツだよ。

話し合い終わって休み時間。

「ちょっと、アキ」

僕がトイレに行こうとしていると美波が僕に声をかけてきた。

「何？美波」

「うん。ちょっと相談があって」

割と真剣な顔をしてるので僕もそれなりに真剣に聞いてみよう。

「瑞希のこと何だけど……」

姫路さんのこと？また体調でも悪くなったのかな。

「実はあの子、転校するかもしれないの」

転…校？

「瑞希，病気になりやすいでしょ？だからFクラス的环境が悪いかららしくて……」

「あー，確かにね」

これだけの悪環境だから姫路さんじゃなくても普通の人は病気になってしまっただろう。姫路さんならなおさらだ。

「あと……，そのFクラスの成績の問題とか」

「成績？」

「当たり前じゃろうな。本来勉強というものは同じレベルの者達が競い合うことによって高めあうものじゃからな」

いつの間にか現れた秀吉がスムーズに話に加わった。恐らく秀吉も美波に話を聞いてんだらう。

「なるほど……」

「それで、今度の清涼祭での『召喚大会』で優勝して両親を見返してやるって」

「そっか……」

召喚大会。

3人一組のチームバトル制で優勝を目指す大会だ。

これは、観客にこれを見せることによって学校の宣伝になるらしい。

「アキは嫌だよね、瑞希の転校なんて……」

「当たり前だよ！それが美波だろうが、秀吉だろうが！！」

「そ、そうよね！！」

美波はとても嬉しそうだ。

「それでさ、坂本も協力して貰えると助かるの。だからアキからお願いで貰えないかな……？」

「んー、どうかな。アイツがそう簡単に折れるかどうか」

アイツは興味のないことはとことん興味を持たないからなあ。

「とりあえずやってみるだけやってみるよ」

とりあえず陸生にも協力して貰おう。

所変わって屋上。

「陸生！！」

「ん？」

陸生は手すりに手をかけてコーヒーを飲んでいた。

「ちょっとお願いがあるんだ」

事情説明中……

「ほお。つまりお前は姫路が転校しないようにFクラスの教室をよくしたい。そのためには雄二の協力が必要不可欠、と」

「そうそう……って違うよ!!」

「へいへい。ま、手伝ってやらんこともないけどな」

「そっか!ありがとう!!」

よし。あとは雄二を説得できれば!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7177/>

---

バカとテストと召喚獣 そして+α

2010年11月18日02時24分発行